80億人の旋律 ◇44◇

ノートルダム大聖堂

荘厳な響き、もう一度

民衆の宮殿、修復に注力

その余波は、まるで天を焦がすかのようだった。2019年4月15日、パリ・セーヌ川の中州シテ島にそびえるノートルダム大聖堂は大火に包まれた。年間1300万人もの観光客が訪れ、800年にわたってパリを象徴する建造物の一つだった教会は、今にも崩れ落ちようとしていた。

静寂

その日の夕方、作家でジャーナリストのアニエス・ポワリエ(48)は、大聖堂の対岸にある仕事場で夜の報道番組出演を控えて準備をしていた。反政府デモ「黄色いベスト運動」が続く最中、大統領のマクロンがテレビ演説を予定しており、注目が集まっていた。

ふと窓の外を見ると、大聖堂の方角から巨大な黒煙が舞い上がっていた。あれほど大量の煙なのだから、何か大きな建物から出ているに違いないと思いながらも、次の瞬間、気付いた。「まさか」

急いで通りに出ると、人々がぼう然と立ち尽くしていた。「教会は閉鎖され、街全体は静かだった。祈りの言葉をつぶやいているのか、唇が動いているが、声はほとんど聞こえなかった」

日が暮れ、火勢はますます強まった。マクロンは演説を取りやめ、消火活動の現場にやってきた。「アベ・マリア」を歌って祈りをささげる人たちもいた。

その後『ノートルダム フランスの魂』を日本でも出版したポワリエは語る。「ナポレオンの戴冠式やドゴール将軍の凱旋など、歴史上重要な出来事が行われてきた一方で、常に『民衆の宮殿』でもあった。建立には庶民や聖職者たちも奮闘した記録[illegible]しており、このような教会は珍しい」

大聖堂は尖塔が焼け落ち、屋根の大部分が焼失したが、被害は甚大だった。消防士たちの努力もあり、建物全体は辛くも倒壊を免れた。

寄付

火災の直後から、フランス国内を中心に世界中から修復のための寄付の申し出が相次いだ。翌日には、グッチやイヴ・サンローランなどの有名ブランドを手がける企業のトップは1億ユーロ(当時のレートで約120億円)を寄付する意向を表明。「モエ・ヘネシー・ルイ・ヴィトン」(LVMH)は会長個人と会社として計2億ユーロの拠出を表明するなど、寄付金の総額は約8億ユーロに上った。

焼け落ちた尖塔は、前と同じものを再建するのか、思い切って現代的なものにするのか――。外装をめぐる議論が盛り上がる中、当初は国際コンペが浮上した。それは、大聖堂の音響をどうするのかという問題だった。火災で屋根が焼け落ちてしまったため、音響はすっかり変わってしまった。

多くの人々を魅了してきた荘厳な響きを取り戻すため、修復を担う研究者の一人がブライアン・カッツ(53)だ。カッツは室内音響の専門家として、建築家や演出家、オペラハウスの設計者らと数々の施設の設計に携わってきた。

カッツは米国生まれだが「フランスの方が研究の自由がある」としてパリに移住し、約10年前にフランス国籍を取得した。現在はソルボンヌ大学で教壇に立つ。

カッツは15年に大聖堂内部をバーチャルリアリティー(仮想現実)で再現するプロジェクトに関わった。当時のマイクで録って残した音の響きのデータが残っていたのが、思いもよらぬかたちで修復作業に役立った。

目的

カッツによると、現在のコンサートホールは、音の残響が約2秒程度だが、ノートルダムは6〜10秒と非常に長かった。「モーツァルトは演奏できないが、ゆっくりとしたオルガンや合唱には理想的だった」と特徴を説明する。

カッツは、コンピューターの中で大聖堂の音響を再現するモデルを半年かけて構築。タペストリーやベンチといった内装や、人々の服装が音に与える影響も把握できるようにした。

カッツが目指すのは、目的に合った音響にすること。「説教の言葉が聴衆により聞こえるようにしたいのか、オルガンを響かせて聞こえるようにしたいのか、それぞれの目的によって一番いい音がある」

修復を心待ちにしているのが、世界的なオルガン奏者として何度も来日しているオリビエ・ラトリー(61)だ。23歳でノートルダムの首席オルガン奏者に抜てきされて以来、38年間この教会とともに歩んできた。

「パイプオルガンにとっての建物は、バイオリンのボディーのようなもの。建物によって一つ一つ違う音がつくられる」と語る。

ラトリーは火災後、レコーディングの仕事で国外にいたが、翌日パリに急いで引き返し、オルガンの様子を確かめた。300年近く前に作られた国内最大のオルガンは、炎からも消火用の水からも奇跡的に無事だった。

穏やかな春の日だった。人々の嘆きに大聖堂はこう語りかけているようだった。「心配しないで。私は千年後もここにいるから」(欧州総局、文・井手壮平、写真・沢田博之)

修復中のノートルダム大聖堂を背にほほえむブライアン・カッツ。1日目は工事の区切りを祝うイベントや大聖堂前の広場が開かれ、多くの市民でにぎわった＝パリ(共同)

仕事場のベランダに立つアニエス・ポワリエ。セーヌ川越しに見えるノートルダム大聖堂は、特徴的な二つの塔(左端)がほぼ無傷で残った一方、祭壇などのある部分が炎や消火作業の水で大きな損傷を負った＝パリ(共同)

フランス編 動画

取材メモ

愛される「聖母」

ノートルダムは「われらの聖母」を意味する。今回、この教会がいかに人々に愛されているかを改めて感じた。世の移ろいとともに関係を保ちながらも、一貫して信仰に寄り添い続けてきたことも大きな理由だろう。火事で入れなくなるまで入場料は無料だった。

修復を巡っては、ガラス窓の現代的な作品への置き換えをする案が浮上するなど賛否が出たが、国民を二分する議論の末、元通りにすることが決まった。工事は2024年12月の完了に向け、順調に進んでいる。

SDGs QUEST みらい甲子園 茨城県大会
君も仲間と一緒に挑戦しよう!
高校生が考える 社会課題解決のための SDGsアクションアイデアコンテスト
アクションアイデア募集
詳細・エントリーは公式サイトから
エントリー開始 2023年9月10日(日) 〉 エントリー締切 2023年12月1日(金)
ファイナルセレモニー：2024年2月23日(金・祝) 会場：茨城県開発公社ビル
SDGs QUEST みらい甲子園とは
https://sdgs.ac
特別協賛 NTT東日本 関彰商事 損保ジャパン
主催：SDGs QUEST みらい甲子園茨城県大会実行委員会
問い合わせ 茨城新聞社営業局事業部 ☎029-239-3006